

# S-face

SFC makes the future through researches

## ムスリムの文化を伝え 共生の道を拓く

野中 葉

VOL.

027

/100

2018.Oct 発行  
和の色: 紅緋色



## 民主化・経済成長とともに イスラームが社会全体に浸透

現在、中国、インド、アメリカに次ぐ人口世界第4位のインドネシア。そのうち約9割の2億2000万人がムスリムという、世界最大のムスリム人口を抱える国でもあります。

インドネシアでは、長く権威主義的政治体制が続いていましたが、1998年にスハルト大統領が退陣してから民主化され、経済成長も進行中です。日本や欧州の歴史を紐解けば、権威主義から民主主義へ移行した社会では、宗教色は薄まっていく傾向が見られます。しかし、現代のインドネシアでは社会のさまざまな側面にイスラームが大きく表出し、以前よりも真面目にイスラームを信仰し、実践する人々が増えているのです。こうした事象の背景には、民主化によって発言や行動の自由を手にした人々が、民主主義や経済成長を歓迎する反面、自らが元々持っていたアイデンティティや信仰を見直す動きがあったのだろうと考えています。

私は2003年頃からこうした動きに関心を持ち、インドネシアのムスリムの女性たちが、現代的ライフスタイルの中でいかにイスラームを受容し、信仰し、実践しているのか、多様な事例を調査し、検証してきました。特に、ムスリムの女性の宗教的装いの一つであるヴェールに着目し、近代的な教育を受けた女性たちがどのようにヴェールを着け始め、どのように装うのかを、社会の変容に照らして研究しています。

## ヴェール着用が当たり前前の時代 よりファッションナブルに

ムスリムの女性は、イスラームの教典クルアーンの記事に基づき、ヴェールや体を覆うような服を身に着ています。実は30年ほど前まで、インドネシアの街中でヴェールを着けた女性を見ることは稀でした。クルアーンはもともとアラビア語で書かれていますが、インドネシア語で読むことが一般的になったのは、教育水準が高まり、出版技術が向上した1980年代以降のことです。翻訳されたクルアーンを読んでイスラームを学ぶ若者が増え、その中からヴェールを着ける女性たちが現れ始めました。

民主化後、ヴェール着用の動きは、都市部に住み、近代的な教育を受け、進歩的な考えを持つ若い女性たちを牽引役としてさらに加速していきました。それでも、私がこの研究を始めた2003年頃は、ヴェールを着けている女性はまだ圧倒的に少なく、着け始めることは大きな決断でもありました。

現在のインドネシアでは、すでにヴェールを着けている女性の方が多数派であり、近年は、より「ファッションナブル」にもなっています。SNSや動画サイトにはおしゃれなヴェールの着け方が数多く投稿され、一般のファストファッションのスカートや服をアレンジして、ムスリムファッションとして着こなす女性も増えました。民主化され、服装についてもある程度自由な解釈が許容されるという、インドネシア特有の社会状況を背景に、ムスリムの女性たちは、イスラームの信仰実践と現代的なファッション性をマッチさせているといえます。

# 変容するインドネシア社会との架け橋に

今日の世界は、総人口の4分の1をムスリムが占め、その中でも最も多くのムスリム人口を擁する国がインドネシアです。

近年は、日本を訪れるイスラーム圏からの観光客も増え、街でヴェールを着けた女性を目にする機会も多いのではないのでしょうか。

野中葉専任講師は、インドネシアの若いムスリムたちの装いの変化を通じて現代東南アジア、特にインドネシア社会の変容について研究し、観光やビジネス分野で注目が集まるイスラームやムスリムと、日本人を繋ぐプロジェクトを展開しています。

## Muslim Fashion

### ムスリムファッション



ムスリムの服装はシックな色合いのイメージが強いが、インドネシアではカラフルでデザイン性の高い服が続々と登場。若い世代を中心に、ムスリムファッション専門の雑誌やファッションショーも人気だ。最近では、日本の着物スタイルを模したムスリムファッションも注目されているという。「実は、日本の着物は肌や体のラインを隠すので、ムスリムファッションとの親和性が高いんですよ」(野中専任講師)

## Deepening Understanding of Muslims

### ムスリムへの理解を広げるために



イスラームに対する社会の関心が高まっている状況をムスリムへの理解を広げるためのチャンスと捉え、さまざまなセミナーで講師を務めるなどの活動にも力を注ぐ。講話の内容は、研究テーマのひとつであるファッションのほか、観光客を受け入れる自治体や事業者からの要望が多いラマダンやハラールといった生活習慣に関することなど、多岐にわたる。

## Muslim Symbiosis Project ムスリム共生プロジェクト



Halal Guide Tokyo

「ムスリム共生プロジェクト」で作成したアプリや観光ガイドブック。現在は、学生がフィールドワークを行い、ハラール対応の飲食店を探してアプリのコンテンツの充実を図ったり、作成したガイドブックを観光客が立ち寄るスポットや店に配布したりするなど、ムスリム観光客や日本で暮らすムスリムに実際に役立ててもらおうための取り組みも展開している。



## 世界の4人に1人はムスリム 理解を深め、違いを超える

2020年には東京五輪を控え、イスラーム圏からのインバウンドは一層増加することが予想されます。同時に、インドネシアを始め、成長市場であるイスラーム圏でのビジネスに魅力を感じる企業も多く、イスラームやムスリムに対し、ポジティブな関心が生まれています。

少しずつイスラームに対する理解が進み、飲食や礼拝などの規範が知られるようになったことで、ムスリムへの対応は「ハードルが高い」と考える事業者の声も聞かれます。実際には、イスラームの教えには、旅行中は普段の生活の規範が守れなくても許されるという柔軟さがあるのですが、そこまで理解が進んでいないのが現状です。また、日本を訪れるムスリムが必要な情報やサービスを見つけることはまだ難しく、情報提供の質と量の充実も求められています。

すでに世界の総人口の4人に1人がムスリムであり、10年後には3人に1人になると言われる時代です。イスラームへの理解を深めることは、グローバル化する世界において不可欠といえるでしょう。今、日本では観光やビジネスの視点からイスラームやムスリムへのアプローチが進んでいますが、経済的利益だけを追求するような理解にとどまらず、より広い視野で、ともに世界を作っていくためにはどうすればいいのかを考えていくことが重要です。両者の理解が深まり、互いの違いを超えて共生していくために、私の研究や知見を役立てていきたいと考えています。



### Profile 野中 葉

慶應義塾大学総合政策学部専任講師。慶應義塾大学総合政策学部卒業。同大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。日本ムスリムファッション協会の理事を務め、ムスリムへの理解を広げる活動にも尽力している。博士(政策・メディア)。専門は現代東南アジア研究(インドネシア)。

### 詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画も  
ご覧いただけます

S-face

検索



慶應義塾大学SFC研究所  
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当  
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322  
Tel: 0466-49-3436 (ダイヤルイン)  
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp